

## 研究の窓

### グローバル化時代の歴史観の構築 —『三つの世界』以前と次の四半世紀

#### 『三つの世界』25周年

エスピン・アンデルセンの『福祉資本主義の三つの世界』（以下、『三つの世界』）の原著が刊行されて25年が経過した。2015年には欧州の社会政策関係学会や専門雑誌で25周年の企画がなされたことに見られるように、『三つの世界』は福祉国家研究の新しいパラダイムを提示し、多くの研究者が育った。私が『三つの世界』を読んだのは、だいぶ遅く、1997年であったが、強い感銘を受けるとともに緊張感を抱いた。その後、大学院のテキストとして何度か使用し、その度に刺激を受けた。本号の特集も『三つの世界』刊行後25年を多少意識して企画がなされている。この四半世紀の研究の展開については多くの人が語るであろう。そこでこの小稿では、自分史を重ねつつ、『三つの世界』以前の福祉国家論の問題意識を振り返りたい。

#### 1980年代の国家論の隆盛と熱い希望

私が大学院に進学したのは1985年であった。この年はソビエト連邦にゴルバチョフ政権が誕生し、スターリニズムは批判の対象となり、ペレストロイカ政策が提唱され、社会主義体制の新たな可能性に期待が高まった。他方、1980年OECDで「福祉国家の危機」が表明されたことにもみられるように、1980年代に西欧福祉国家システムは動揺し、新自由主義の思潮が強まるなか、資本主義変革の可能性と方法が模索されていた。そのような時期、国家論が注目され、特にネオ・マルクス主義のそれが新しい地平を切り開いていった。ネオ・マルクス主義国家論は、一方でスターリン主義批判を含み、他方で資本主義変革を視野に入れたものであった。それは資本主義体制としての福祉国家に特有な搾取・疎外・貧困や資本の権力に対する批判意識を有していた。また、スターリン主義と親和的な単線の歴史観に対する批判も含まれていた。当時の大学院生の間では、ヨーロッパの研究者としてアルチュセール、プーランツァス、ミリバンド、オッフエなどが、日本の研究者では田口富久治、加藤哲郎などが盛んに読まれていた。それは資本主義批判の視点を獲得するとともに、社会主義への微かな希望をつなぎとめるための知的な営みであった。その論点は多岐にわたる。例えば、資本主義における民主主義の問題、資本蓄積と体制的危機、階級形成と階級連携、階級分派、国家権力の特質、先進国革命の可能性などである。これらの論点について一左派に冷笑を浴びせる者も含めて一誰も熱く人生をかけて語っていた。時代の進歩に僅かな期待が抱かれ、目的論的な思考が維持されていたのである。

#### 経済学における資本主義の変革と進歩

私が徒弟訓練を受けた経済学の領域でも、当時マルクス経済学は一定の影響を残していた。国家独占資本主義論は1970年代に彫琢・立体化されたが、資本主義の体制的危機論を基盤にしていた。だが、1980年代に入り、福祉国家の危機が叫ばれ、「福祉の見直し」がなされるようになると、国家独占資本主義論は福祉国家論に変貌した。東京大学社会科学研究所の『福祉国家』全6巻はその一つの代表であった。それはマルクス的な発展段階論あるいは大塚史学的な市民社会論を基盤にしており、時間軸の中で資本主義も何らかの発展・変化していくことを想定していた。誤解を恐れず単純化すれば、発展する時間意識を有し、進歩と希望を想定し、眼前の福祉国家を危機から救い出す問題意識を有していた。中心的論客の一人であった加藤栄一は、福祉国家論を彫琢するなかで、福祉国家を「中期資本主義」段階の現象としてとらえ、中期資本主義の産業構造が解体するなかで福祉国家の危機を論じた。加藤は「後期資本主義」の到来を宣言したが、後期段階に相応しい国家システムが形成されないことにシステムの危機を見出していた。それは資本主義の混迷を示唆するものであった。加藤は、混迷への処方箋を書くことはしなかったが、明確に資本主義の発展段階という時間軸の中で福祉国家の変容を捉えようとしていた。そこには時間の中で進歩する社会という歴史認識を維持していた。「変革」という言葉は時間の流れの中での「進歩」を想定したものであり、経済学も熱く福祉国家を語っていたのである。

#### 社会主義の崩壊—資本主義国は皆（みな）福祉国家

1989年のベルリンの壁崩壊まで、そのような時間意識を多かれ少なかれ政治学者や経済学者は共有していたと思われる。ベルリンの壁崩壊からソビエト連邦の解体は社会主義体制の歴史的敗北を確認させるものであった。そし

て、時間の経過の中で進歩するという歴史観の終焉をもたらした。エスピ・アンデルセンの『三つの世界』はそのような時代に登場した。もちろん、これのもととなった研究は1980年代になされたものであり、ネオ・マルクス主義国家論やマルクス経済学の影響も強く受けている。また、「脱商品化」概念を使って、三つのレジームを類型化する姿勢には、北欧式高福祉国家の魅力を主張しているようにも思え、社会民主主義レジームを唱道する政治的な価値観が見え隠れする。多くの者が指摘するようにエスピ・アンデルセンが社会民主主義レジームを志向していることは明らかであろう。

だが、『三つの世界』はそのタイトルが示すようにアメリカ合州国も福祉国家であることを承認するものであった。「アメリカも含めて福祉国家の資本主義なのだ」という宣言は、「福祉国家になり損ねた国・アメリカ」という常識に異議を申し立てるものであった。また、「大陸型」「産業業績達成モデル」など定義が分かりにくかった大陸型福祉国家について「保守主義」と定義したことは画期的であった。福祉国家を近代政治思想の二大潮流である自由主義と社会主義との二項対立の中に位置付け、資本主義体制で発現する社会主義を社会民主主義と読み替え、曖昧ではあるが根強い思潮を保守主義と定義した。これにより福祉国家を政治思想と関連付けて類型化することにした。エスピ・アンデルセンが第四の福祉国家類型を認めない理由は、近代の政治思想がこの三つに収斂することを行わなかったためであろう。

#### 進歩無き並列的資本主義国家観

「どこの（西洋）資本主義も福祉国家だ」と見なすことで、悩むことなく資本主義の福祉国家比較が可能となっただけでなく、非西洋世界の資本主義国の研究者にも「うち（わが国）も福祉国家として分析できる」という問題意識をもたらした。東アジア諸国でも多くの研究業績が生み出される素地を作った。だが、これにより時間的進歩という歴史認識は後景に退いてしまった。「アメリカもスウェーデンも福祉国家だ」ということは、低い福祉国家から高い福祉国家への「移行」の希望を語る必要性を失わせる。そこでは国家の個性はあるが進歩はなくなる。それがエスピ・アンデルセンの本意であったのかどうかは別として、『三つの世界』は、複数の福祉国家類型が並列的に成り立つのだと見なすことで、進歩という観念を後退させることになった。

#### 露払いとしての『歴史の終わり』

これはフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』を想起させる。『歴史の終わり』と『三つの世界』がほぼ同時期に刊行されたことは偶然ではないように思われる。『歴史の終わり』が受け入れられた時代意識のなかで『三つの世界』が受け入れられたと思われる。フクヤマは政治思想のレベルにおけるイデオロギー的対立の終焉を宣言し、進歩としての歴史は終わったのであると主張した。生き残ったのは自由民主主義のみであるということになる。だが、フクヤマは社会民主主義・保守主義を自由主義から区別する概念を持たず、社会民主主義も保守主義も広い意味での自由民主主義として論じた。そうすれば北欧社会民主主義も西ドイツ保守主義も含めて自由民主主義が最終的に勝利したと躊躇なく宣言できる。進歩史観に妨げられずに『三つの世界』を論じる舞台が整えられた。目的論的な社会科学は表舞台から退場し、比較制度分析のような国家間の種差性分析に取って代わった。『三つの世界』はその主役として活躍し、人気を博した。

#### 人類史の中で21世紀の福祉システムを構想する

だが、今日新しい歴史観が求められているように思われる。それはある種の目的論を有するものであろう。というのも、環境、福祉、人口、人権、安全保障において我々は希望を語る言葉を紡ぎださなければならないからである。それはグローバル化を人類史という時間軸の中で位置付けるという知的作業を伴うだろう。それは19世紀にヘーゲル、マルクスらが並列的静態的でない新しい歴史観を提示したことに似た知的作業であり、しかし、20世紀の失敗を直視した歴史観である必要があるだろう。福祉国家論もその一連の作業の中で位置付ける必要があるだろう。その際、『三つの世界』以前の知的試みを再吟味することは有意義な作業であるように思われる。

#### (参考文献)

- 加藤栄一 (1989) 「現代資本主義の歴史的位相」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第41巻第1号  
加藤哲郎 (1986) 『国家論のルネサンス』青木書店

菅 沼 隆

(すがぬま・たかし 立教大学教授)